

# 「秋山記」冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図

## 正本 綴子

はじめに

併せて、秋成の表現意図を考えてみたい。

『藤篋冊子』<sup>〔1〕</sup>卷三に収められた「秋山記」は、城崎に湯治に出掛けた際の旅の様子を綴った紀行文である。従来この文章は、秋成の実生活に即した旅行記として捉えられ、その本文解釈は彼の伝記と密接なところでなされてきた。確かに「秋山記」は、秋成の実体験を素材として成ったものであろう。しかしその表現をたどつてみると、必ずしも秋成は自身の旅の忠実な記録を残そうとしたのではないように見受けられる。

本稿では「秋山記」冒頭の、これまで不可分に扱われてきた秋成の伝記と一旦切り離した解釈を試みる。特に冒頭を扱うのは、冒頭の表現は文章の性格を規定するもので、作者の意図を知ろうえできわめて重要な部分であるとともに、これまでの解釈において、とりわけ秋成の伝記と直接関わらせて論じられてきた箇所だからである。

まず初めに、『藤篋冊子』の中の「秋山記」の位置を確認して

おく。『藤篋冊子』の目録を次に示す。<sup>〔2〕</sup>

藤篋冊子目録

第一 歌集

藻屑 屏風哥七十首

第二 同上

同 春夏秋長短合体三百七十余首

二之余 同上

同 冬雑長短合体三百余首

第三 紀行

秋山記

第四 文集

落葉 十雨言二篇 花園 年木

御嶽さうじ 初秋 中秋 月の前

剣の舞 以上十章

第五 同上

水無瀬川 郝廉留銭 古戰場 聴雪二篇

做李白春夜宴桃李園序 ふる郷 鄭韓退之送李愿侍御歸隱序

硯銘 風鈴 枕の硯 雨蛙

旌孝記 以上十一章

第六

鶉居 其二 紅梅 嵐山夕曉篇

秋秋 枕の流 三余 よもつ文

附録

露分衣 夏野の露 關達尼之遺作 合十章

つららふみろく終

(一〇卷・二〇～二二頁)

卷一・卷二は歌集で、卷三から卷六までは和文を取めた文集である。「秋山記」は卷三として独立している。この卷三には「紀行」という部立が示されており、卷四以下の「文集」という部立とは異なっている。しかし卷六には部立は示されておらず、特に統一意識はないようである。また卷四には「御嶽さうじ」という中編の紀行文が収録されている。この二点から、『藤篋冊子』においては「秋

山記」を文章の性格から特別視しようとする意識はなかったと判断して良からう。

それでは「秋山記」の本文を、はじめから見えてゆくことにする。

あきの山見にとにはあらで、此三とせかほど、足びきのやまひにかゝづるひて、世のわたらひも何もはかしくしからぬ、かゝるを、昔は、但馬の城の崎のみで湯にしるし見しかば、こたびもまたおぼしたてるを、しりに立てくる人も、としごろふかうそみしことあれば、ともにとて、はゞそ葉のおほせのまゝにめしつるゝなりけり、 (一〇卷・一二六頁)

ここでは旅の動機と、旅立ちを決心するまでの経過が簡単に語られる。素材となった城崎への旅は、一七七九(安永八)年のことと推定される。この部分で問題としたのは、①「此三とせかほど、足びきのやまひにかゝづるひて」、②「世のわたらひも何もはかしくしからぬ」という二つの表現である。

①から順に検討する。かつて高田衛氏は『上田秋成年譜考説』において、この記述に基づき、一七七七(安永六)年に「某月、この年ごろから足痛がおこる」という項を立てられた。また一七七九(安永八)年の「但馬国城崎湯へ出発」の項でも、「城の崎温泉は、慢性胃腸病によいといわれているが、秋成の多病は胃腸病系疾患であったかどうか」と記し、一貫して「秋山記」冒頭の記述を事実として捉えられた。近年では森山重雄氏が、「足びきの」はあくま

でも「やま」にかかる枕詞で足の病の意味ではないとしながらも、「この旅の第一目的が病気の療養にあった」と、実際秋成も病んでいたという解釈を示されている。新日本古典文学大系『近世歌文集』<sup>10</sup>下(以下、新大系)では両氏の説を受けたのか、「足びきのやまひ」については「やま」にかかる枕詞。この時の病いが何であつたかは不明。<sup>11</sup>「秋成の持病は胃病であつたとも考えられる」と注されている。<sup>12</sup>

ここで、『臆大小心録』第六九段の、當時を回想した記述を見てもよい。

翁商戸の出身、放蕩者ゆへ、家財をつみかねたに、三十八歳の時に、火にかゝりて破産した後は、なんにもしつた事かない故、医者を先学ひかけたか、村居して、先病をたんさくに見習ふた事しやあつた。四十二で城市へかへりて、業をひらいたか、不学不術のはつた事故、人の用いぬ事はしつてゐる故、たゞ医は意しやとこゝろへて、心切をつくす趣向かついて、合点のゆかぬ症と思へは、たのまぬに日に二三へんも見にいた事しや。いやくと思へは、外の医士へ転しさせても、相かわらず日々見まふた事しや故、病人もよろこぶ、家族もとかうけかよかつたて、

(九卷・一七二頁)

ここでは、熱心に往診や見舞いを繰り返したことが語られている。自身も病気がちであつたのをおして出かけていたとはとても考えに

くい書きぶりであり、「秋山記」で語られた内容とは大きく異なっている。同じ時期のことを語るのにもこうした差異が認められるのであるから、このような記事への目配りをしないまま「秋山記」の記述のみを事実として捉えることには大きな危険が伴うことが明らかになってくる。

また「足びきのやまひ」という表現を秋成は、他にも『檜の杣』(一八〇〇〈寛政一二〉年序)の序例冒頭で用いている。

檜の葉の習はぬ事も、人の分見し跡とめつゝゆかは、いにしへの野中ふる道も、あやし迷はし神はつくまじきを、おのれ此十とせはかりこなた、あしひきの病に繋かれて、天にます神の目ひとつさへ、あしたゆふへの霧霞におほにしも成にたるには、

(二卷・一三三頁)

これに従えば、患い始めたのは一七九一(寛政三)年頃からということになり、「秋山記」の記述とは一〇年以上の開きがあつて一致しない。この表現は秋成の好んだ常套表現であつて、必ずしも事実を記すものではない可能性もある。

このように当時の秋成が実際に病んでいたかどうかは、決して「秋山記」の記述のみからは確定できない。この点にまず留意しておきたい。

②についても、同様のことが言える。この「世のわたらひも何もはか／＼しからぬ」という表現については、森山氏が事実との齟齬

を指摘されている。<sup>13</sup>氏は当時の秋成の安定した生活ぶりのあらわれ「膽大小心録」第五〇段をあげ、医業もきわめて順調で、経済的にも貸家を持つほどの余裕があったと述べられる。文人としての活動の方面も、既に蕪村とはこの頃には交流があるし、ほかにも几重や木村兼霞堂との交流、加藤宇万伎の葬儀の執行、文業も『雨月物語』の刊行、ほか様々な和文の成立などにあらわれているように、活発であつたらしいと推察される。この頃の生活が「はか／＼しくからぬ」ものであつたという記述とは一致しない。

とすれば、この齟齬の理由をどのように説明するかが問題となつてくる。前掲『上田秋成年譜考説』において高田氏は「医業はいちおう安定をみせているが、身体が弱いため万事とどこおりがちで<sup>14</sup>」あつたとされ、森山氏は「作者の主観においては真実であつ<sup>15</sup>」たと解釈しておられる。新大系では「秋成はこの時、医を業としていた。<sup>16</sup>」と記すに留まり、そこに齟齬があることには触れられていない。いずれも「秋山記」の記述を事実として捉える方向で論じておられる。

しかし文章の語り手が生活の苦悩を告白していたとしても、それが実際の秋成の状況を言っているとは限らない。もとより「秋山記」の語り手と秋成とをまったくの同一人物として考えるから解釈に困難が生じるのであつて、ここは秋成と病にかかつて生活もおもわしくない「秋山記」の主人公との間の距離を、今少し大きくとつて捉

える必要があるのではないだろうか。つまり「足びきのやまひ」も「はか／＼しからぬ」生活も、ともに虚構であつたと考えるのである。

## 二

冒頭で虚構の設定をすることの意味は後に述べることとして、その前にもう一点検討しておきたいことがある。

「秋山記」では旅の動機が記されると、継いでいよいよ出発という日の模様が綴られる。

長月の十日あまり二日といふ日かど出す、したしき友垣の女の許より、あすなるときこえ給ふにぞ、ゆくりなくもおもふたまふる、玉鋒の道もたえ／＼にとか、おぼつかなき／＼へそひて、胸つぶる／＼ぞわりなき、

朝なゆふな／＼れにし君が出てゆかば、何わざをして月日過さん、

秋風もいたう身にしむころにしも侍れば、いとよいいたはりて、御こともなくかしこにいたり給ひね、此あつごえたるもの、いとあら／＼しげなれど、山里の朝よひしのがせたまはんにはとてなんと、聞えこしに、

情ある人のこゝろをつくし綿、身にそへゆかばさむけくもあらじ、

うべしも天の羽ごろもと奉りぬるは、こゝろさすところなん、  
山陰の国にて、いといたう寒き所なりける、

(二〇卷・一二六―一二七頁)

ここで登場する「したしき友垣の女」は、従来秋成の歌道の弟子である唯心尼であると考えられてきた。周知のごとく唯心尼は、秋成の友人である大坂の商人平瀬助道の妻で、夫と死別して剃髪、晩年の秋成の風雅の友として重要な位置を占める人物である。秋成自身が記したものとすれば、よく引かれるもので、『山霧記』(一七九八―寛政一〇〇〇年成)の冒頭の記述がある。

目のいたはり、此夏は世離れのとかならん所にとて、河内の国の人のいさなへるにつきて出たつ。山里ながら家たち並て、人氣遠くもあらず、よろつに心ゆくやとりなり。あるしの尼は、廿とせあまりこなた、うらなきかたらひ人にて、たえず間聞ゆるか、身幸ひなく、親、をとこにはやう別れ、四十たらぬほとよりかしらおろして、此庵住にいみしう行ひするいとまには、ふみよみ手習ふわさをつとめて、昔のせいさゝかもおほしいつる事なく、いみしきためしにかそへつへき人なりけり。

(一一卷・一九四頁)

この記述が確かならば、城崎への旅はちょうど交際の始まった頃、唯心尼はまだ俗体であった時分にあたる。出発の際にこのようなやりとりがあったとしても矛盾はしない。

しかしこの女性を唯心尼であると結論付けてしまうことには、慎重になる必要があると思う。唯心尼は『藤篋冊子』に何度か顔を出す。その時の呼称を次に列挙する。

〇卷二

河内の国にとひゆく人のありて、はろく来たりき、こそ秋、なき人をこゝに伴なひこし事を思ひ出て、すらに打なかれつゝ

身は同じ家にも物思ふ心をいつち宿りかへてん

(二〇卷・一〇七頁)

〇卷二

河内の尼、足袋ぬひておくりしに、

浅沓のあさましきまで老ぬれば此たひを世の限とぞ思ふ

かへし

唯心尼

あさくつの浅くは君をたのまねはなと此たひや限なるへき

(二〇卷・一一五頁)

〇卷四「年木」

とし木こりつむといふことをよめる、

唯心尼

たき木こる峰の手斧のおときけばほどくとしもくれはてぬ  
めり

(二〇卷・一六九頁)

〇卷五「古戦場」

唯心尼、我難波のやどりをとひ来て、かたりなくさむるほと

に、れいの手ならひにすべく、物らいひてきかせ給へと云、

(一〇卷・二〇三頁)

### ○卷五「風鈴」

峰なす夕雲の立居する比は、必よ、南の風の薫りくると云、  
むべも河内の足立の尼がおとづれ聞えしに、取そへて、風れ  
うの詞、かうばしき紙二ひらに書つらねたるを、

(一〇卷・二二〇頁)

### ○卷五「雨かはづ」

菊

唯心尼

山ぶみの家路のつとに折てこし、香ぞなつかしき白菊のはな

(一〇卷・二三四頁)

### ○同

右寛政十年の夏五月廿日まりより、文月のつごもり方までの  
事を、日なみのさまに、唯心尼に筆かはらせし、山霧の記と  
云中に書出せし也、

(一〇卷・二三五頁)

### ○卷六「こを梅」

河内国くさ香の郷の唯心尼が、すむ軒の木立に、あるじにか  
はりていへるは、しひたるもとめのさがりがたければ也、

(一〇卷・二五四頁)

このようにいずれの例も「唯心尼」と明示するか、居住地名や姓  
を添えて特定可能な書き方がなされている。これら一連の表現と、

「したしき友垣の女」という醜化した表現との間には明らかに差異がある。またいずれも剃髪して河内に隠棲した後の記事で、それ以前  
の交流のものは「秋山記」以外には見当たらない。「藤篋冊子」以  
外にも総じて秋成は唯心尼の俗体の頃を語らないことを、森山氏が  
指摘しておられる。これらのことを考え合わせれば、「したしき友  
垣の女」を唯心尼であるとは限定できないし、またそうする必要も  
ないと思われる。というのは、問題とされるべきは、ここで登場す  
る女性が誰であるかということよりも、むしろその女性を「したし  
き友垣の女」と表現した意図の方であると考えるからである。これ  
は、先に検討した語り手の生活状況をいう表現にも同様に言える。  
つまり「秋山記」の冒頭で虚構の設定がなされたこと、そしてここ  
で登場する女性をあえて「したしき友垣の女」と表現したことの意  
味にこそ注目したいと思うのである。

### 三

以上二点と関わって、掲出箇所末尾に近い「天の羽ごろも」と  
いう表現に着目したい。ここで取り上げるのは『伊勢物語』第一六  
段である。尼になった妻と別れた紀有常と、その友人とのやりとり  
を描いたものである。稿本『よしやあしや』(一七八一〜一七八八  
年〔天明年間〕頃成)の本文によって見てゆく。まず有常の境遇が  
次のように紹介される。

人からは心高く、あてなることをこのみて、こと人にもにす、  
わたらひ心なく、まつしうしても猶むかしよかりし時の心なから、よのつねのこともしらす

わたらひは生活過活なとかきて、世わたりの事なり、世に  
諂らふこともしらねは、おのつから貧しけれと、よかりし  
時の心のまゝにて操を守る人也、かやうの人の世にあはぬ  
は今のみにあらざるにこそ (五巻・三〇一頁)

「わたらひ心」のない人物が中心となっている点でまず注目され  
る。さらに離れてゆく妻に何一つ贈ることのできない有常が友人に  
文を送るといふ場面から見てみたい。

思ひわひて、ねんころにあひかたらひけるともたちのもとに、  
かうく、今はとてまかるを、なにことも、いさゝかなる事も  
えせでつかはすことゝかきて、おくに

手を折てあひ見しことをかそふればとをといひつゝよつは  
へにけり

(秋成注略)

かの友たち、これを見て、いとあはれと思ひて、よるの物まで  
おくりてよめる

(秋成注略)

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひ君をたのみき  
ぬらん

(秋成注略)

かくいひやりたりければ

これや此天の羽衣うべしこそ君かみけしとたてまつりけれ  
天の羽衣といふに法服をおくりたるもしるく、おくり  
物をほむるによろこびをこむるかむかし人の手きは也  
御着料也、うへしのしはそへたる辞にて宜こそなり、  
たてまつりければ押いたゞく也、贈り給ふ物は、とれ  
もく天の羽衣といふへき、此世の物ならぬやうなる  
は、うべこそ道理なれ、かく貴き君か御着料なるもの  
をといたたきをさむるといふ意也 (五巻・三〇二〜三〇三頁)

「秋山記」の「うべしも天の羽ころもと奉りぬる」といふ表現は、  
傍線を付した有常の和歌とほぼ一致する。『伊勢物語』の「たてま  
つりけれ」を秋成は「押いたゞく」の意でとっているのので、「秋山  
記」の記述も同様に解釈する。『伊勢物語』のこの場面には、「わた  
らひ」の順調ではない主人公、友人からの衣類の贈り物、そして  
「天の羽衣」を「うべし」と「たてまつ」ったことと、こうした点  
に「秋山記」との共通項が見出だせる。これらを勘案して、「秋山  
記」の旅立ちの場面は、この『伊勢物語』の場面をふまえて執筆さ  
れたものとして良いであろう。「秋山記」の「足びきのやまひにかゝ  
づろひて、世のわたらひも何もはかくしからぬ」といふ境遇の主

人公の心象は、零落した風流人紀有常のそれと重なり、「秋山記」の出立の場面は、『伊勢物語』のこの段のわびしさと風雅とに背後から支えられることになる。語り手の苦境は、旅立ちの日の演出の一環としてあえて設定されたものであり、また「したしき友垣の女」から衣類が贈られてきたことを語ったのもこのこととの関わりによる。「秋山記」における架空の世界は、冒頭から既に構築されている。そしてそれは『伊勢物語』第一六段を想定した、物語的な情緒の漂う世界であったと言えるのである。

ところで、「天の羽ごろも」は神事での天皇の湯かたびらを指すことがある。『江家次第』巻第一〇の一―月新嘗祭に次のような記事がある。<sup>23</sup>

神嘉殿、東南有<sub>二</sub>四間屋<sub>一</sub>（南方神祇官弁<sub>二</sub>備供神事<sub>一</sub>、中間大膳計<sub>二</sub>度供神物<sub>一</sub>、北妻宮内采女等<sub>二</sub>祝候<sub>一</sub>）南間、前立<sub>二</sub>台<sub>一</sub>（其兒如<sub>二</sub>中取<sub>一</sub>、雨降、可立<sub>二</sub>門中<sub>一</sub>）積<sub>二</sub>神座<sub>一</sub>（中和門外北<sub>二</sub>掖設<sub>二</sub>近衛<sub>一</sub>、幕）主殿寮供<sub>二</sub>御湯<sub>一</sub>、縫司供<sub>二</sub>天羽衣<sub>一</sub>、次御湯殿次<sub>二</sub>聞司<sub>一</sub>就<sub>二</sub>版<sub>一</sub>（無<sub>二</sub>勅答<sub>一</sub>、近代又無<sub>二</sub>版<sub>一</sub>）

『冠辞統類』（一八〇一―亨和元）年刊「あらそめの」の項に「江次第には。訓もて荒染と書り。」（六巻・一四五頁）との記述が見えるなど、<sup>24</sup>秋成は古典研究の考証に『江家次第』を活用する。城崎への旅の目的が湯治として語られていたことと、この湯かたびらを「天ノ羽衣」と呼ぶ表現とは無関係ではないかもしれない。また

同様の記事は『建武年中行事』にも見える。一七三二（享保一七）年には谷村光義によって『建武年中行事略解』が刊行されている。当時、このような有職故実書への、歌人や国学者の関心は決して低くなかったようである。

「うべしも天の羽ごろも」という意味深長な表現には、これらの背景を想定することができるのである。

### おわりに

「秋山記」の冒頭で秋成がめざしたのは、決して事実や自身の心境の直接的な記述ではなかった。むしろここで展開するのは、自らの学問の成果を抛り所とした仮想の世界である。久保田淳氏は、一条兼良の連歌寄合書『連珠合璧集』の旅に関する項目から、中世における旅のイメージに憂き世の嘆きがあることを指摘された。<sup>25</sup>また同時に、これは中世の典型でありながら、『万葉集』の旅の歌・『伊勢物語』東下り・『土佐日記』・『源氏物語』須磨明石への流謫などに通じるものであるとも述べられる。<sup>26</sup>「秋山記」の冒頭に語られた旅の動機も、こうした憂き世の嘆きのイメージと軌を一にする。とすれば冒頭の虚構の設定は、遠く上代から連なる伝統的な道の記のスタイルに則ろうとする意図のあらわれでもあったと考えられよう。「秋山記」に伝統的な背景を投入しようとする意識があったことは、出発の場面に『伊勢物語』を重ね合わせたことから推察できる。

「秋山記」の性質を以上のように捉え直すことは、秋成文学におけるこの紀行文の位置付けを考え直すことにもつながるであろう。

注

- (1) 完本は、一八〇六（文化三）年秋に巻一から巻三まで、翌一八〇七（文化四）年春に巻四から巻六までが刊行された六冊本である。
- (2) 以下秋成の著述の引用は、『上田秋成全集』（中央公論社）による。引用の末尾にはその巻数と頁数を私に付した。またルビは概ね省略し、一部漢字やおどり字の表記を現行のものに改めた。なお傍線は筆者が付したものである。
- (3) 長島弘明氏は『藤簀冊子』の和文（『文学』一九九五年七月）において、「秋成は文体別の編集・構成にはあまり注意を払っていないようである。」とし、秋成に限らない当時の文体意識として、次のようにも述べておられる。

歌体への関心はともかくとして、和文の文体・分類に関心を示さなかつた和学の伝統を承けて、この頃の和文集の文体による分類意識も、全体に同時代の漢詩文集のそれより遙かに薄い。
- (4) 「おぼす」は本来ならば尊敬表現であるが、秋成の文章においては語り手自身の行為に対して「おぼす」を用いることが少なくない。その際、敬意は消失しているようである。『藤簀冊子』では、次のような例がある。

○巻四「落葉」  
秋山ぞ我はいひしをこそ、ひたぶるにこめいたるさがおぼさるゝなれ、（一〇巻・一五八頁）

○巻四「十雨言」其二

高き御あたりのありさまはおもひかけねば、おぼししられぬを、

（一〇巻・一六四頁）

前後の文脈を勘案しても、この「秋山記」の記述において「おぼした」ったのは語り手であると判断して良からう。

- (5) 同じ旅に取材して執筆された『ぬばたまの巻』（一七七九〔安永八〕年序）の序に、「安永八年の秋、たちまのゆあみに出たてて、（五巻・五五頁）とあることによる。
- (6) 明善堂書店・一九六四年一月。
- (7) 一〇〇頁。
- (8) 一〇四頁。
- (9) 『秋山記』を読む（『秋成 言葉の辺境と異界』〈三一書房・一九八九年五月〉所収）。三七頁。
- (10) 中村博保氏校注（岩波書店・一九九七年八月）。
- (11) 三三八頁・注二。
- (12) 三三八頁・注五。
- (13) 注9に同じ。三八頁。
- (14) 一〇四頁。
- (15) 注9に同じ。三九頁。
- (16) 三三八頁・注三。
- (17) この「玉鉾の道もたえ／＼にとか、」の部分も、従来「したしき友垣の女」が唯心尼であるという前提で解釈されてきた。森山氏は歌の道が途絶えてしまうことと解釈されている（注9に同じ〈三九頁〉）。中村氏は音信がままならないことを言ったものとされている（新大系〈三三八頁・注一二〉）。「とか」は不確かな伝聞をあらわし、下には「きく」や「いふ」を補うのが適当であると考えられる。また例えば

『万葉集』では「玉鉾の道」と言えば旅の道程を指すことがほとんどで、その道中を案じる内容の歌で常套的に用いられるようである。これらの用例をふまえて、これも「旅の道のりもおぼつかないものと聞いております」といった意でとりたい。

(18) 森山氏(注9に同じ)〈三九頁〉、中村氏(新大系)〈三八八頁・注一〇〉。

(19) 『山霧記』妖狐譚とその史的背景(注9前掲書所収)。二三七頁。

(20) 底本は原則として真名本である(日野龍夫氏による『上田秋成全集』第五巻の解題に詳しい考証がある)。

(21) 引用は、広島大学蔵本による。刊記「承応二<sup>年</sup>孟夏吉旦<sup>日</sup> 蓬生巷林鶴。なお割注は( )で示した。

(22) 木越治氏「秋成の著作にみえる書名索引稿」(『金沢大学 国語国文』第六号・一九七八年三月)を参照した。

(23) 「〈旅〉の発見」(『国文学』一九七四年一月)。

(24) 注23に同じ。

——まさもと・すいこ、本学大学院博士課程後期在学——